

古墳

古墳は、3世紀から7世紀にかけて、日本社会の支配や上流階級の埋葬に一般的に使用されていた土の埋葬塚です。群馬県の13,000を含んで、全国に約30,000の古墳が存在します。古墳の埋葬は、日本の歴史のこの時期を定義しているため、一般に古墳時代（約250～552年）として知られています。遺構を間に挟むように古墳が作られ、その上に土塁が盛り上がっています。

鍵穴、円形、正方形、長方形など、さまざまな古墳のスタイルがあります。土の外観は段々になっている場合もあれば、滑らかであることもあります。多くの古墳は丸い石で覆われ、埴輪で飾られていましたが、ほとんどの場合、それらは時間とともに消え、草や木さえも成長した土の外観だけが残りました。今日、小さな古墳は見分けがつかないことがあります。それらはしばしば、草の生い茂った丘に似ているか、完全に侵食されています。

古墳には、武器、鏡、金属製品（馬の鞍など）、宝飾品、陶器、素焼きの置物、儀式用の物などが発見されています。

美術館周辺の公園には、5～6世紀の古墳がいくつかあります。これらの古墳は総称して白石古墳群と呼ばれていますが、通常は稲荷山、七興山、猿田、下郷の4つの支群と呼ばれるほどに広がっています。個々の古墳にも別々の名前があります。

白石稲荷山古墳は5世紀のもので、最古のものです。長さ155m、高さ13.5mの鍵穴型古墳を含みます。七興山支群内の中では、長さ150m、高さ16mの七興山古墳は、東日本最大級の鍵穴型古墳です。6世紀に造られたもので、現在は樹木に覆われています。

埴輪

当館に展示されている遺物の多くは、白石群の古墳から出土したものです。その中には、通常は古墳の外側に置かれている埴輪などがあり、考古学者や研究者が出土品をもとに研究を進めてきました。

埴輪という言葉は文字通り粘土の輪を意味します。大きく分けて2つのタイプに分類されています。境界を示すために古墳の周りに置かれた円筒形の埴輪と、死者の生活や権威、祭祀を象徴するための形象埴輪。形象埴輪には、若い女性、正装した男性、武士、相撲取りなどが描かれています。また、魔除けの盾を持っているものもあります。

人間の埴輪像はしばしば独特の顔の表情をしています。博物館で最も貴重な遺物の1つは、6世紀の風変わりな人型である笑う埴輪で、下田遺跡と呼ばれる場所から発掘されました。2018年には群馬県で発掘された最も人気のある埴輪のひとつとして表彰されました。

古墳時代後期に作られた埴輪は、鎧などの衣装で描かれることが多く、馬は色とりどりで、考古学者に現在まで生き残っていない衣類や革製品などの情報を提供します。群馬県の古墳建設の全盛期である5世紀から6世紀にかけての埴輪窯が、2018～2019年に猿田で発見されました。発掘調査より、いくつかの埴輪と、焼成温度を上げるために自然の斜面を利用して作られた長さ10mほどの登り窯が発見されました。

その他の古墳遺品

古墳の上や中には他の陶器も残っています。器は儀式に使われていました。器を捧げたり、割ったり、穴を開けたりする行為は、死者に別れを告げるための方法だったと考えられています。

古墳の中からは、金銅で彫られたループピアスや石で作られたネックレスなどが見つかりました。考古学者は、1組のループイヤリングに使われている金銅は日本では見つからないことを確認しており、朝鮮半島や中国との交易を通じて日本に入ってきた可能性があることを示唆しています。

他にも古墳時代の日本の国際貿易の証拠として、七輿山グループの平井地区 1 古墳から出土した刀剣があり、博物館の入り口から見るができます。この刀は朝鮮半島から来たと考えられています。同じグループから出土したもう一つの遺物は、近くの皇子塚古墳から出土した鳳凰頭の形をした剣の柄を指輪で囲んだものです。

古墳時代が始まる前から、磨かれた青銅で作られた鏡が中国から日本に持ち込まれ、重要な葬儀の物品となりました。おそらく光を反射したためか、力の象徴と見なされていたと考えられています。鏡は金型で鋳造されていました。鏡の非反射面には、通常、同心円状のリングや、お守りの力を持つと考えられている動物の像が飾られていました。

7世紀の日本では、仏教が普及するにつれ、古墳葬の習慣は衰退していきました。